

## [プレゼントについて]

北ドイツ出身の友人に、誕生日プレゼントを渡した。何だったかは、今になっては思い出せない。毎年のことなので高価なものではなく、「ほんの気持ち」の品だったはずだ。(ちなみに彼女からは、よく自分の好きな本をプレゼントされた。)包みを開けた彼女は、「まあ、きれい！ 本当にありがとう！」と喜んでくれた。そして続けた。

「でもこれは、私のもとではきっと“箏笥の肥やし”になってしまうから、気持ちだけいただくわ。誰か本当に使ってくれる人にあげてね。」返された！

さすがの私もちょっとびっくりしたが、このことが彼女との友情に影を落とすことはなかった。本当に裏表のない人と知っているのも、その「正直さ」が印象深かっただけだ。

日本人なら考えられない行為だろうし、実はウィーン人でもあまりあり得ない話のはずだ。さすがドイツ人！ と言うと語弊があるかな。さすが北ドイツのプロイセン気質！のほうに当たっているかもしれない。ベルリンの友だちとも似たような体験をした記憶があるし。

民族の資質の違いは本当にいろいろだ。さて、アメリカ、イタリア、フランスの友人はどうだっただろうか、と思いを馳せる。

イスラエルの作家、エフライム・キシヨンのスケッチには、落語の高座で聴いてみたいような話がたくさんあるが、その中の一つを紹介しよう。

### 『お礼のやり取り』

コインパーキングで小銭がなくウロウロしていた男に、たまたま通りかかった友人が、(助けるつもりで)自分の小銭をメーターの機械に入れてあげたところから始まる。

家族ぐるみで、お互いに「倍返し」のお礼合戦が延々と続く。カーネーションの花束やら、バラの花束やら、船旅やらコンサートの定期会員権やら、家の居住権やら、その悩みと合戦は尽きることなく、オチは、最初に小銭をアゲた友人がコインパーキングで同じ「苦境」に遭遇。今度は相手から小銭を“恵まれる側”になり、その後の展開を思って真っ青になる、というもの。

ただ、日本の贈答やプレゼントの習慣は、ヨーロッパの人たちには理解がたいようだ。

初めて日本に来たドイツ人の若いピアニストは、帰国の折に新しいトランクを買わなければならないほど、色々な人から「おみやげ」をもらった。とても喜んではいたものの、私は彼女から何度も、「なぜ私はいただくの？」と問われた。

クリスマスとか誕生日とか、「ちゃんとした理由」なしには、何も贈ったりもらったりしないのが、ヨーロッパの習慣だからだ。

「初めて日本に来た記念」に喜んでもらいたい、というのは「ちゃんとした理由」には含まれないのかもしれないけれど、一生懸命説明した。多分、くださった皆さんの心は、しっかりと彼女に伝わったと思う。

「手土産」も日本とアチラでは大違い。ホームパーティなどの食事に招かれると、花束やワイン1本、CD、本、あるいは食品だとチョコレートの詰め合わせくらいは持っていく。でも、「旅行のお土産」を渡す習慣はヨーロッパにはない。そもそも、各地の特産品や食べ物を、贈答用に売っているお店は見つからない。探す人もいないが、「特産品」というものはあるのかしら…。もちろんその土地それぞれの美味しいものはあるけれど、それらを「手土産」として買うという発想がまずない。だから外国の人は、日本で各地の駅などで見る「お土産物コーナー」に目を丸くする。(ウィーンのホテルザッハーには、観光客用にザッハートルテが置いてあるが、これは例外。私もしょっちゅう日本用を買って帰った。)

会社の上司や仲間には、ヨーロッパの人はどうするかって…？「お中元」や「お歳暮」だって存在しないなのだ。もちろん「義理チョコ」も。きっと私の知り合いは皆、「オミヤゲ？ 何のため？」というだけだろう。

ついでに一つ付け加えると、プレゼントを渡す際は、花束なら包んであるラップなどをもって、“裸のまま”渡す。誕生日プレゼントなどは、できるだけ、どこで買ったかわからないようにする。できれば、自分で買った包装紙で包みなおす。美しい包装紙はお店でたくさん売っている。買ったものをきれいに、名前のついていない紙で特別にラッピングしてくれる店なら、それでもいい。

とにかく、百貨店などの名前が入った包装紙のまま渡すのは、失礼と受け取られるのだ。なぜ、と問われても答えられないが、「いいもの、高いもの、あるいはステータスのある」プレゼントではなく、「自分の気持ち」を表すことのほうが重要という習慣ではないだろうか。だから一冊の本でも、きれいに包んでプレゼントする。

ドイツへきて間もない日本の友人が、病院で簡単な手術を受けた。健康保険制度がしっかりしている国である。かかった費用の心配はなかった。彼女の悩みは、お世話になったお医者様へのお礼。どうしたらいいのか、またどのくらいが適当なのか。

相談を受けた私は、周りの多くの人に尋ねてみた。ところが、誰も私の質問の意味をわかってくれない。

「謝礼？」「何のために？」「どうしてそんなこと考えるの？」

お医者様は自分の仕事をして報酬を受けたのだから、それ以上の何が必要なのか、というのが皆から得た共通の答えだった。

オーケー、“蛇の道は蛇”と言うではないか。医者に直々訊いてみるのが一番。ウィーンの義妹は、個人の診療所を持ちながら、大病院の心臓内科部長でもある。でも、彼女も私の問いを一笑に付した。

「そんなことを考える人にお目にかかったことはないけれど、そんな謝礼を受け取ったとしたら、即、首が飛んじゃうわ！」

腕のいい産婦人科医で知られていたウィーンの大叔父は、さらにこう言った。

「昔はクリスマスになると、皆の健康を祈って、かかりつけの患者にシャンパンを1本ずつ贈ったものだなあ！」

日本の友人は考えに考え、悩んだ末、結局クリスマスに自分のCDを1枚、お医者様にお礼として持って行った。彼はとても喜んでくれたそうだ。

「こんな素敵なプレゼントをいただけるなら、あなたのこと何回でも手術しちゃうよ！」